やまと万葉がたり

奈良山を　にほはす黄葉（もみち）　手折（たを）り来て　今夜（こよひ）かざしつ　散らば散るとも

三手代人名（みてしろのひとな）（巻八・一五八八）

738（天平10）年旧暦10月17日に、橘奈良麻呂邸での宴（うたげ）の席で詠まれた歌の中の一首です。同歌群ではすべての歌が「黄葉」ということばを詠み込んでいることから、「黄葉」の題が設定された文芸の宴だったことがうかがえます。

宴の冒頭で、主催者の奈良麻呂が「手折らずて散りなば惜しとわが思ひし秋の黄葉をかざしつるかも」（巻八・一五八一）と、手折らずに散ってしまったら惜しいと思って来た秋の黄葉をいまかざしにした、と詠んでいることを受けて詠んだ歌とみられます。

かざしとは、髪や冠に生花や造花、枝や葉などを挿すという意味の動詞「かざす」が名詞化したもので、「挿頭」と書きます。もともとは植物の生命力を身につけようとする呪術的な意味がありましたが、後には単なる装飾として、金・銀・銅などで模した植物や、鳥の羽や動物の尾を冠につける場合も「挿頭」と呼びました。この歌では「黄葉」を挿頭にしたとあり、なかでもそれは「奈良山をにほはす黄葉」であったとあります。

「にほはす」とは色付かせるという意味で、「衣にほはせ」（巻一・五七）「秋の野をにほはす萩は」（巻十五・三六七七）などと詠まれます。葉の色が変化することに、古代の人々は霊妙な生命力を感じ取ったのかもしれません。それをもう十分身につけたのであとは散ってもよい、というのは当時の宴席歌にしばしば見られる表現です。

【訳】奈良山を美しく色どる黄葉を手折って来て、今夜かざしにした。もう散るなら散ってもよい。

奈良山は平城京の北方、佐保・佐紀一帯に広がる低い丘陵の総称であり、平城京内にあった橘奈良麻呂邸からほど近い場所だったとみられます。三手代人名の閲歴は不明ですが、正倉院文書には四分律という仏教書を校合した御手代平伎波都の名がみえ、同じ氏族だった可能性が指摘されています。

（県立万葉文化館指導研究員・井上さやか）

＝次回は20日

やまと万葉がたり

わご大君 物な思ほし 皇神の つぎて賜へる われ無けなくに

御名部皇女（巻一・七七）

この歌は、元明天皇の大嘗祭が行われた708（和銅元）年のものであり、元明天皇が詠んだ歌に対して御名部皇女がこたえた歌とされています。元明天皇の歌は「ますらをの 靫の音すなり もののべの 大臣 楯立つらしも」（勇士たちの靫を弦がはじく音が聞こえて来る。物部の大臣が今しも楯を立てているらしいよ）というものでした。

元明天皇の歌に詠まれる「もののべの 大臣」とは、天皇の即位に際しての大嘗祭などで石上（旧物部）氏が大盾を立てる儀礼を行っていたことから、和銅元年3月に左大臣になった石上麻呂のことを指しているとも言われています。

その場合、この歌は元明天皇が自身の大嘗祭の様子を詠んだ歌になるとされます。他に、蝦夷征討のための閲兵式の歌とする説もあります。

さて、元明天皇の歌にこたえた御名部皇女は、元明天皇の姉にあたる人物でした。彼女が、妹である元明天皇を勇気づけるような歌を詠んだのは、元明天皇の即位の事情によるのかもしれません。

元明天皇は天智天皇の娘で、天武・持統天皇の子である草壁皇子の妻となりました。草壁皇子は天皇位を継ぐことなく早世します。その後、草壁皇子との間にもうけた子である軽皇子が即位して文武天皇となりますが、文武天皇も若くして亡くなります。文武天皇にも子（後の聖武天皇）がいましたが、まだ幼く即位できる年齢ではありません。そこで、元明天皇が即位することになるのです。

こうした状況下で即位した元明天皇の心中は、国家統治への不安が渦巻いていたのかもしれません。そうした時に、天皇を、そして妹を支え勇気づけるような歌を御名部皇女は詠んだのです。

天皇位であれ他の職責であれ、重責を担う人には周囲の支えが必要です。元明天皇が平城遷都や風土記撰進などの重要な政策を実行できた影には、こうした人々の支えがあったのだと思われます。

【訳】わが大君よ何も御心配はいりません。皇祖の神が大君についてお与えになった私がおりますものを。

（県立万葉文化館主任研究員・吉原啓）

＝次回は12月4日